七高僧 ① 龍樹菩薩

親鸞聖人がインド・中国・日本の三国七人の高祖を選ばれました。今月からその七人の菩薩、高僧方を一人ずつ紹介していきたいと思います。

紹介する前に七人の高祖を選ばれた理由を述べます。

三国にわたって浄土教を弘宣された高僧方は多数いらっしゃいましたが親鸞聖人が七人を選定されたのは

① 自身が浄土往生を願生し、著述があって阿弥陀さま他力の法を弘く伝えられておられること

② 教義において発揮する特色があること

③ 本願の宗旨を伝持し、さらにそれを高揚していること

右の三つの条件であると真宗の先哲はあげておられます。

龍樹菩薩の略歴

龍樹菩薩は梵名をナガールジュナといい、龍勝又は龍猛と訳されました。

出生の年代は異説ありますが、大体、西暦一五〇年ごろのお生まれで、南インドのベラール地方の富貴なバラモン族の長男でした。

生まれつき聡明で、その天性は非凡であり少年期から青年時代にかけて、天文・地理・医学などの学問を究め、その名声は四方に伝わっていたそうです。

一時は享楽主義にふけり、宮殿に友人と忍び込み、宮殿にいる女官をたぶらかしていたが、ある時、とうとう見つかってしまい、友人は処刑され、龍樹菩薩は命からがら逃げのび、このことを縁として罪悪ということ、無常ということに気付き真剣に宗教の道に入られたのです。

龍樹菩薩の著述・教義の発揮

龍樹菩薩の撰述は多く、後世の人は千部の論主と称され、また八宗の祖師として崇敬されています。

浄土真宗の所依の聖典として親鸞聖人は

十住毘婆沙論　十七巻
十二礼　一巻

を選ばれています。

では教義の発揮は『十住毘婆沙論』「易行品」において一代仏教を難行道と易行道とにわけられ、

難易二道判

を明らかにされました。ここに浄土真宗の自力他力の根源が示されたということができます。

親鸞聖人は難易二道について「正信偈」に次のように分かりやすくお示しです。

顕示難行陸路苦
信楽易行水道楽
憶念弥陀仏本願
自然即時入必定

現代語に訳すと

龍樹菩薩は、難行道は苦しい陸路のようであると示し、易行道は楽しい船旅のようであるとお勧めになる。

阿弥陀仏の本願を信じれば、おのずからただちに正定聚に入る。

となります。

すなわち、阿弥陀さまの本願他力のお救いは楽しい船旅のような易行（お浄土へ往き易い）の道であり、厳しい修行をつとめて悟りを開く仏教は苦しい陸路を歩いて行く難行（行くことが難しい）の道であると龍樹菩薩はお示しになりました。

最後に『高僧和讃』「龍樹讃」の一首を紹介します。

本師龍樹菩薩の
おしへをつたへきかんひと
本願こころにかけしめて
つねに弥陀を称すべし

法語の世界

《原文》

前住様実如御病中、正月二十四日に仰せられ候ふ。前々住蓮如の早々われに来いと、左の御手にて御まねき候ふ。ありがたやと、くりかへしくりかへし仰せられ候ひて、御念仏申し候ふほどに、おのおの御心たがひ候ひて、かやうにも仰せられ候ふと存じ候ば、その義にはなくして、御まどろみ候ふ御夢に御覧ぜられ候ふよし仰せられ候ふところにて、みなみな安堵候ひき。これまたあらたなる御事なりと云々。

（『蓮如上人御一代記聞書』二百七十一）

《現代語訳》

大永五年一月二十四日、ご病床にあった実如上人が、「蓮如上人がはやくわたしのところに来い」と左手で手招きをしておられる。ああ、ありがたい」と繰り返し仰せになって、お念仏を申されるので、側にいた人々は、病のために心が乱れて、このようなことをも仰せになるのであろうと心配しました。ところが、そうではなくて、「うとうとと眠ったときの夢で見たのだ」と、後で仰せになったので、人々はみな安心しました。これもまた尊い不思議なことです。

二月七日にご本尊と蓮如上人宮殿の修復を株式会社「仏壇の古屋舗」に依頼しましたが、その際、蓮如上人の御影の修復も一緒にお願いしました。

三月三十日に御影の修復が終わり、御台前に奉懸しましたので修復前と修復後の写真を掲載しお知らせします。

▲　修　復　前

▲　修　復　後